

顕彰状

第十四代沈壽官（大迫恵吉）氏は、1926年12月3日、鹿児島県日置郡東市来町に生まれ、早稲田大学には、1948年第一政治経済学部自治行政学科に入学した。1964年、薩摩焼宗家第十三代の父の逝去にともない、第十四代を襲名した。

我が国屈指の伝統工芸として名高い薩摩焼は、遠く慶長3年の昔、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、島津義弘によって薩摩に定住を強いられた韓人陶工の集団に始まる歴史を有している。島津家の庇護のもととはいえ、祖国を離れ、異境に身を置く辛苦の日々のなかで、陶工の子孫たちは、嘗々として民族の誇りと文化を守り続ける傍ら、新たな境地を拓き、やがて世界の陶芸に独自の地位を占める薩摩焼の豊かな伝統を我が国にもたらし、今日に至った。

初代沈当吉に始まる父祖の技を受け継ぐべく、第十四代宗家を継承した氏は、天賦の血脈に加え、出自の誇りと旺盛な探求心によって、やがてその名に相応しい作品を次々と世に送りはじめた。薩摩焼はここにさらなる発展の時を迎えたのである。渡来陶工の集団によって生まれ、我が国の土壤に花開いた薩摩焼の諸派は、形式、作風ともに幅広く変化に富んでいる。なかでも、きわだった技の典型と目されるのが、世に聞こえた「黒薩摩」であり「白薩摩」である。氏は土と炎との対話の中から、堅固な造形と「用のぬくもり」を併せ持つ日々の器にはじまり、鑑賞用の磨きぬかれた作品に至るまでの、まさに多彩な作品を次々と生み出し、それぞれが高い評価を集めてきた。氏の手になる黒薩摩は、深く豊かな黒の彩りが暖かな光を湛え、白薩摩は、清冽な白の冴えに繊細な優しさを併せ持ち、肌合い・姿形ともに見る者の心を捉えて放さない。錦手の華やかさも、第十四代宗家の作風の幅の広さを伝えて余すところがない。亡き司馬遼太郎氏によって命名された「井光黒」や「薩摩切子写し」は、このような氏の芸術の特質を的確に言い表したものとして、世に広く知られるところである。その卓越した制作活動の成果により、84年、栄えある「文部大臣表彰」を受けたのをはじめ、93年「鹿児島県民表彰・教育文化部門」、さらに96年には「第47回南日本文化賞・芸術文化部門」を受け、早稲田大学は98年、全学を挙げて氏を校友として迎えている。

父祖の国韓国と我が国との芸術文化の架け橋として氏が果たした役割と献身も忘れるわけにはいかない。100回を越える韓国滞在の間、各大学での講演、幅広い人々との対話をはじめ、展覧会や記念行事の主催など、氏が日韓の親善交流に果たした努力の数々は枚挙にいとまがない。89年にはその功績にふさわしく大韓民国名誉総領事に任命され、99年には韓国政府から「銀冠文化勲章」、暁園大学より名誉博士号が贈られている。

第十四代沈壽官氏の多年にわたる創作活動は、我が国の陶芸史に新たな世界を拓くと同時に、広く社会の発展に貢献するところ極めて大きいものがある。早稲田大学はこれらの功績に対し、芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2000年3月25日

早稲田大学